

---

# 研究の概要

---

内田順子

## 1. 経緯

国立歴史民俗博物館（以下「歴博」とする）には、スコットランド出身の医師ニール・ゴードン・マンロー（Neil Gordon Munro, 1863～1942年）が、1930（昭和5）年に撮影したとされるアイヌ民族のクマ送り儀礼に関する映画フィルム（35mm, 可燃性フィルム, 4巻）が保存されていたが、どのような経緯で歴博が収蔵することになったのか、また、オリジナルなのかコピーなのか、などの基本的な資料調査がおこなわれていなかった。そこで、歴博の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（代表：内田順子, 2004～2006年度）の枠組みで資料批判的な研究をおこない、その成果を、歴博の民俗研究映像「AINU Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの—」（製作・著作：国立歴史民俗博物館、製作協力：東京シネマ新社<sup>(1)</sup>）としてまとめたほか、映像の中に収められなかった事柄については、研究ノート<sup>(2)</sup>のかたちで報告した。

この研究の過程で、英国王立人類学協会（Royal Anthropological Institute, 以下「RAI」とする）が所蔵するマンローの手紙、論文草稿、写真資料の部分調査を、2005年に実施することができた。これらの資料は、マンローと研究交流のあった民族学者チャールズ・ガブリエル・セリグマン（Charles Gabriel Seligman）宛に、アイヌ研究の成果としてマンロー自身が送っていたものであり、マンローのアイヌ研究の全容を知る上で欠くことのできない資料群である。RAIとの研究交流において、これらの部分調査とビデオによる撮影をおこなうことができ、同じ2005年に、RAIから次のようなプロジェクトの提案をうけた。マンロー関係の資料を所蔵する日英の関係機関が協力し、それぞれが所蔵する資料をデジタル化して共有してはどうか、というものである。2002年に開催された「海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構ほか主催）の準備期間に、展示関係者によってRAIが所蔵するマンローの文書類が調査され、その際RAIは、マンローの残した文書等の学術資料としての重要性を認識し、こうしたプロジェクトを考えるようになったという。マンローが収集した工芸品等の器物資料については、前述の展示の際にその全体像が明らかにされたが、文書、写真、映画については悉皆調査がおこなわれていない状況にあった。マンローがコレクションした器物資料の背景を知る上でも、文書や写真は重要な情報源と考えられ、これらをデジタル化し情報を統合することで、アイヌ文化研究の資料として、より充実した内容になることが予測された。2005年、歴博はRAIのデジタル化プロジェクトへの参加を館として受け入れるに至った。

こうした経緯により、マンローの写真・文書を所蔵する日英の6つの研究・教育機関によるデジ

---



図1 マンロー関係資料デジタル化プロジェクト参加機関

タル化のプロジェクト「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」(以下「本プロジェクト」とする)へとつながってゆくことになった。このプロジェクトに参加している機関は図1のとおりである。

本プロジェクトを推進するために、日本側ではいくつかの研究プロジェクトを立ち上げた。

まず、2005年、予備的な研究プロジェクトを、人間文化研究機構連携研究の予備研究「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究—『夷酋列像図』とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み—」(代表:佐々木史郎, 2005年度)の枠組みで実施し、RAIのメンバーを日本に招いて、RAI、歴博、北海道開拓記念館等の関連資料の調査をおこなったほか、RAI所蔵の資料のリストと写真資料のコピーの提供をうけた。また、マンローのアイヌ研究の拠点であった平取町において、地元の研究協力者の参加を得て研究集会を開催し、デジタル化の対象や方法、成果のまとめかたについて協議した。

翌2006年度からは、本プロジェクトを進めるために、3つの研究プロジェクトを立ち上げ、本格的に始動した。3つの研究プロジェクトは、それぞれ以下に述べる目的と課題設定で進められた。

## 2. 目的

歴博では、館蔵のマンロー関係の写真資料を中心とする共同研究「マンローコレクション研究—館蔵の写真資料を中心に」(代表:内田順子, 2006~2008年度, 以下「共同研究」とする)を発足した。この共同研究は、歴博が所蔵する写真資料について、研究資料として活用していくための基盤づくりをおこなうことを目的とするものである。中心的な課題はふたつである。ひとつは、アイヌ民族の人権に配慮した活用の基本方針を検討することである。マンローが残した写真資料には、アイヌ民族の肖像写真が多く含まれるからである。そこでこの共同研究では、写真に写っている人物や物等の調査と、公開基準についての検討を進めた。もうひとつの課題は、写真の資料批判的な研究である。歴博が所蔵している写真は、プリントではなく、ガラス乾板やニトロセルロースのネ

がであり、オリジナルのネガであるのか写真の複製のために制作されたネガであるのか調査する必要があった。また、写っている内容の検討から、マンローの死後に撮影された写真も存在することがわかった。このように、資料として活用するための基本的な調査と資料への情報付与が、この共同研究の中心的な課題である。

日英の関係機関が所蔵する資料をデジタル化して統合するためには、機関を超えて、デジタル化の基本方針や公開基準などを検討し、デジタル化を進める必要がある。これについては、共同研究の枠組みではなく、別の研究プロジェクトをたてて進めることになった。

2005年度に予備研究としておこなった人間文化研究機構の連携研究は、翌2006年度から3年間の研究プロジェクトとして進めることが認められた（「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究—『夷酋列像図』とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み—」，代表：佐々木史郎，マンロー班総括：内田順子，2006～2008年度。以下「連携研究」とする）。この枠組みでは、デジタル化の基本方針や公開基準について、機関を超えて検討するための国際会議や海外調査をおこなうことを中心課題として取り組んだ。

デジタル化に必要な予備調査やデジタル化による資料収集、資料整理は、科学研究費「欧米の人類学映画・写真に見えるアイヌ文化のイメージについての研究」（代表：内田順子，2006～2008年度，以下「科研」とする）による経費で進められた。

以上の3つの研究プロジェクトは、このようにそれぞれ独立した研究課題をもっているが、研究成果は相補的な関係にある（図2）。たとえば、歴博が所蔵しているのは写真のネガであり、マンローによる説明などは一切付与されていない。一方、RAIが所蔵するのは、マンロー自身が送付したプリント写真であり、裏面には、マンロー自筆の説明が書き込まれている。連携研究および科研の枠組みでこれを調査し、デジタル化を経て比較することが可能になったことで、歴博の写真の基礎情報が補われ、共同研究でおこなった人物や物の調査もいっそうの推進が可能となったのである。

## マンロー関係資料デジタル化プロジェクト

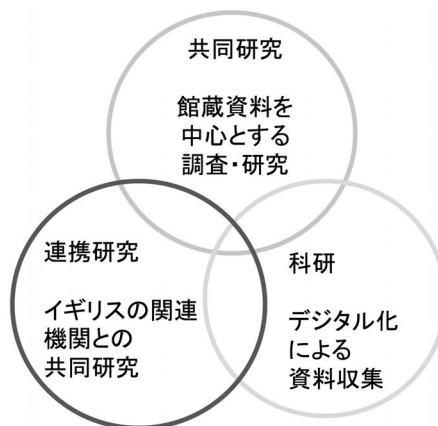


図2 各研究プロジェクトの相互関係

以上により、本報告書は、この3つの研究プロジェクトの成果を含むことになる。

### 3. 調査・研究の過程

本研究プロジェクトの特徴は、共同研究・連携研究・科研それぞれのプロジェクトの相互性とい  
うところにある。共同研究・連携研究・科研それぞれの調査・研究の過程を表1にまとめた。

表1 研究の経過

	歴博共同研究 「マンローコレクション研究—館蔵の 写真資料を中心に」	機構連携研究 「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究—『夷酋列像図』 とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み—」	科学研究費 「欧米の人類学映画・写真に見えるア イヌ文化のイメージについての研究」
平成 17 年度	歴博基盤研究「民俗研究映像の資料論 的研究」(2004～2006年度、研究代表 者：内田順子)の枠組みで歴博所蔵の マンローによる映画フィルムの資料批 判的研究をおこない、民俗研究映像 「AINU:Past and Present」をまとめた。	予備研究として 【調査・研究打ち合わせ】 2月13日～2月21日 RAIの研究者3名を招聘し、国立歴史民俗博物館、下中 記念財団、北海道開拓記念館、酪農学園大学、北海道立 文書館で関係資料の調査を実施した。RAIからも、同機 関が所蔵する関係資料のリストおよび写真のコピーが提 供され、相互に情報交換ができた。またマンローのアイ ヌ研究の拠点であった平取において、地元の研究協力者 の参加も得て研究集会を開催し、1)デジタル化の対象、2) デジタル化の方法、3)情報管理方法、4)公開対象・公開 基準等について検討した	—
平成 18 年度	【研究会】 9月8日(歴博) ①情報の集約方法の検討 ②歴博所蔵資料の予備調査 9月9日(横浜都市発展記念館) 青木祐介(横浜都市発展記念館)・ 岡本孝之(慶応大)両氏と研究交流。 マンローの考古研究についてレク チャーを受ける。 11月22日(二風谷生活館) ①開拓記念館所蔵の関連資料につ いての報告(出利葉浩司) ②館蔵資料の撮影内容の検討(内田 順子・宮田公佳) ③写真の公開基準とイギリスでの研 究集会にむけた準備	【調査・研究会等】 12月3日～21日(イギリス) ①RAI・NMS所蔵資料の調査(RAI, NMS) ②デジタル化の基本方針についての研究会(大英博物館) 1月14日～16日(二風谷) デジタル化の基本方針についての研究会 2月17日(北海道開拓記念館) 所蔵資料のデジタル化についての打ち合わせ 2月18日(平取町公民館) シシリムカ文化祭視察 2月19日(アイヌ民族博物館) マンロー関係映画フィルムに関する調査・打ち合わせ 2月20日(二風谷生活館) 1. 12月のイギリス調査の報告 ①デジタル化済みRAI資料の整理状況(宮田公佳) ②国立スコットランド博物館資料について(内田順子・ 森岡健治) ③マンロー出生地の調査について(萱野史朗) 2. 来年度の研究計画 ①デジタル化の対象について ②調査日程と方法について ③会議日程について 2月21日(北海道大学付属図書館) マンロー関係映画フィルムに関する打ち合わせ 3月16日～17日(神戸・大阪：国立民族学博物館) ①マンロー夫人チヨの親族を訪ね、デジタル化のプロ ジェクトについての説明を行い、了解を得る(神戸)。 ②連携研究代表者への活動報告(民博)	【調査・研究打ち合わせ】 10月11日～18日(ロシア・イギリス) 「AINU:Past and Present—マン ローのフィルムから見えてくるも の」(ビデオ、102分)を第3回モス クワ国際映像人類学映画祭(10月12 日、モスクワ大学)で公開、人類学 映画におけるアイヌ民族の表象の問 題について討論した。また、12月 のRAI所蔵資料のデジタル化に向 けて事前調査と打ち合わせを行っ た。  【デジタル化・資料調査】 12月4日～20日(イギリス) ①RAI所蔵の写真・文書のデジタ ル化。総数2103画像。 ②NMS所蔵資料の調査

<p>平成19年度</p>	<p><b>【研究会】</b> 9月16日～17日(軽井沢) マンローの軽井沢時代の情報収集 研究情報の共有化の検討</p> <p><b>【調査・研究打ち合わせ】</b> 5月23日(歴博)ガラス乾板の調査(日大:高橋則秀氏) 6月13日～16日(開拓記念館・北海道大学等) 関連資料の調査 8月3日～6日(平取町・北海道大学) 人物調査・関連資料の調査 10月13日～15日(平取町)人物調査 11月23日～25日(東京・名古屋)人物調査 3月27日～30日(歴博)調査データの 確認作業</p>	<p><b>【調査】</b> 6月25日～7月7日(イギリス・ドイツ) ①マンローの遺族(リュウベック在住)訪問。マンロー関係資料のデジタル化について許諾を得た。 ②科学映画研究所(ゲッティンゲン)およびRAIにて関連の映画資料の調査 9月29日(松前町資料館) 『夷酋列像』研究班の成果視察, マンロー研究班の成果のまとめ方について打ち合わせ。 11月1日～2日, 5日(アイヌ民族博物館・北海道大学) 関連する映画フィルムの調査 12月1日～9日(イタリア・ドイツ) ①民族学博物館(フィレンツェ)にて, マンローと親交のあった人類学者フォスコ・マライーニコレクション中のマンロー関連資料の調査。 ②ミュンヘン民族学博物館(ミュンヘン)にてアイヌ関係写真資料の調査 12月6日～7日(北海道大学) 関連する映画フィルムの調査 12月13日(東京) 北海道大学所蔵の関連フィルムの調査 1月5日～20日(イギリス) NMSにおける科学研究費による関連資料のデジタル化の作業の視察および原資料とデジタルデータ双方の確認。 2月26日～27日(東京) 北海道大学所蔵の関連フィルムの調査</p> <p><b>【研究会】</b> 3月7日～8日(北海道開拓記念館) ①今年度の調査全体の成果について(内田順子) ②海外調査についての報告 ・フィレンツェ・ミュンヘン(手塚薫・森岡健治) ・エジンバラ(内田順子) ③分担課題の報告および成果公開方法の検討(内田順子・貝澤耕一・貝澤徹・萱野志朗・山岸俊紀・吉原秀喜・出利葉浩司・手塚薫・森岡健治・岡田一男) ④来年度の計画 ⑤北海道大学所蔵のマンロー関係の映画について(岡田一男)</p>	<p><b>【調査・研究打ち合わせ】</b> 6月25日～7月7日(イギリス・ドイツ) マンローの遺族を訪ね, 著作権等の整理をおこなったほか, NMS所蔵資料のデジタル化について検討するため資料調査および打ち合わせをおこなった。 <b>【デジタル化】</b> 1月5日～20日(イギリス) NMS所蔵の写真・文書のデジタル化。総数1627画像。</p>
<p>平成20年度</p>	<p><b>【研究会】</b> 1月22日～27日(釧路等) 歴博所蔵資料のバックデータとなる資料(RAI・NMS所蔵の書簡資料)の読み合わせを行い, 公開についての問題を検討したほか, 写真・書簡についての公開基準を検討した。 3月14日(歴博) 研究成果のまとめかたの検討</p> <p><b>【調査・研究打ち合わせ】</b> 7月22日～24日(平取町)人物調査 9月18日(歴博)館蔵資料の調査 11月8日～9日(平取町)成果の公開方法の検討 12月21日～23日(平取町・札幌市・白老町)成果の公開方法の検討 2月22日～23日(平取町・阿寒町)成果の公開方法の検討 3月26日(歴博)館蔵資料の調査 3月30日(北海道大学)成果の公開方法の検討</p>	<p><b>【研究会・調査】</b> 6月8日～9日(平取町) 「マンロー先生を偲ぶ会」(北海道大学文学部二風谷研究室)に参加, 同会とともに, 北海道大学所蔵のマンロー関係の映画についての公開検討会(沙流川歴史館)を開催。 6月13日～6月15日(平取町, 札幌市) 「北海道大学アイヌ・先住民研究センター・サテライト2008年度第1回講座」に参加し, マンロー研究についての最新の研究情報を調査。 11月24日～11月29日(イギリス) RAIにおいて, マンローの映画についての最新の研究成果の報告をおこなったほか, マンロー関係資料デジタル化プロジェクトの参加機関で交わす予定の契約書・成果の公開方法について検討する会議を開催。また大英博物館において, 1910年開催の英日博覧会の時に平取のアイヌたちが残した資料の調査をおこなった。 3月2日～3月9日(イギリス・ドイツ) RAIにおいてデジタル化プロジェクト契約書の最終的な案について検討する会を開催し, 合意案が概ね定まったほか, それぞれの機関が所有するデジタルデータの共有方法や公開範囲, 研究成果の公開方法について検討し, 詳細をつめていくことが合意された。 また, リュウベック在住のマンローの遺族を訪ね, マンロー関係資料のデジタル化や, 今後の活用について再度説明し, マンロー書簡に見える家族をめぐる記述について, 資料の公開による問題がないかどうか確認し, 了解を得た。</p>	<p><b>【試験的データベースの作成】</b> 本館所蔵のマンロー関係の写真資料のほか, 本科研においてデジタル化をおこなった北海道開拓記念館所蔵のマンロー関係のランタンスライド, RAIおよびNMS所蔵のマンロー関係の写真・文書について, それらを統合的に検索できるデータベースを試作し, 比較研究をおこなった。</p> <p><b>【調査・研究打ち合わせ】</b> 3月2日～3月9日(イギリス・ドイツ) RAIにおいて開催した会議において, それぞれの機関が所有するデジタルデータの共有方法, 公開範囲, アイヌ民族の人権に配慮した研究成果の公開方法について検討したほか, リュウベック在住のマンローの遺族と打ち合わせをおこない, マンロー関係資料のデジタル化や今後の活用について説明し, 了解を得た。</p>

## 4. 成果

本プロジェクトの調査・研究の諸過程では、二風谷のアイヌ民族であり、地域のアイヌ文化の伝承活動に従事する貝澤耕一、貝澤徹、萱野志朗各氏のほか、平取町教育委員会の山岸俊紀氏に継続的にご参加いただき、プロジェクトの成果が、アイヌ文化の伝承活動にとっても有意義なものとなるよう、一緒に検討していただいた。これによって、歴博所蔵の写真資料、RAIおよび国立スコットランド博物館（以下「NMS」とする）所蔵の手紙資料をモデルケースとして公開基準案を検討し、ひとまずの結論に至ることができた。

本報告書においては、拙稿「写真・映画の資料化に伴う諸問題—マンローコレクションを対象に—」において、資料の公開基準案の経緯が報告されているほか、資料紹介「国立歴史民俗博物館所蔵の『北海道沙流川アイヌ風俗写真』」（内田順子）、および「北海道開拓記念館所蔵のランタンライド」（手塚薫・出利葉浩司）は、この公開基準案に則して画像を掲載したものである。

写真、映画に関する研究成果としては、歴博所蔵の写真ネガと、関連資料の比較研究をおこなった森岡健治の「『アイヌ写真帳』の比較—平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵本と国立歴史民俗博物館所蔵本—」、また、マンローの映画制作の実態について、北海道大学が所蔵する関連フィルムと、RAIおよびNMS所蔵の書簡資料、歴博所蔵の写真資料の読み解きを通して明らかにした岡田一男「ニール・ゴードン・マンローの1930年代アイヌ民俗誌映画への取り組み—ウウエボタラ（悪霊払い）の記録を中心に—」が収載されている。いずれも、これまで詳細に研究されたことのない資料を扱っており、資料の整理だけでも多くの時間が必要であったが、両氏の論考によって、日本に残されたマンローの写真と映画について新たな研究情報が示された。

先住民族に関する資料を、研究者だけでなく、先住民族自身に開いていく取り組みは、日本ではその緒に就いたばかりであり、本プロジェクトにも手本があったわけではなく、歩きながら考え、現時点において最善と考えられる結論を導き出したものである。本報告書に収められた手塚薫「伝統的知識の公開と『社会関係資本』としての活用—UKにあるマンロー書簡の社会ネットワーク分析を中心に—」、出利葉浩司「マンロー・テキストはなにを『返還』するのだろうか—マンロー関係資料デジタル化プロジェクトの今日的意義—」は、マンローの書簡資料の分析・読み解きを通して、それが今日においてどのような意義を有するのか考察しており、本プロジェクト自体を対象化する試みである。吉原秀喜の論考「マンロー関係資料研究・活用上の地域的諸課題—北海道平取地域におけるアイヌ文化継承の現状に即して—」も、本プロジェクトが開始される以前に、マンローに関して平取においてどのような地域活動がおこなわれたのか詳細に記述し、そうした地域における本プロジェクトの意義というものが対象化されている。研究成果をどのように公開してゆくことがよいのかを考える上で、対象とする資料の性格、地域との関係などを考慮し、本プロジェクトそのものを複眼的に見る思考が常に必要とされたが、三氏の論考は、そうした取り組みの成果と言えるものであろう。

共同研究・連携研究・科研によって得られた情報（デジタル化した写真・書簡等のデジタル画像、聞き取り調査によって得られた情報等）を一元的に管理し、データベース化する試みは、おもに科研の経費で進められた。宮田公佳の指導により、資料のデジタル化とデータベースの試行をおこなっ

た城石梨奈の「『マンロー関連資料デジタル化プロジェクト』におけるデジタル化作業の過程」は、そのプロセスをまとめたものである。

なお、本プロジェクトにおいてデジタル化された日英関係機関の資料の統合およびその公開は、成果物の形態や成果公開の方法についてイギリス側機関と協議中であり、途上にある。本報告書は、ひとまず、紙媒体にまとめることが可能な範囲で、歴博と北海道開拓記念館所蔵の写真資料の基礎情報、これまでの研究で明らかになったこと、研究の方法についての考察をまとめ、研究発信をおこなうものである。それによって、新たな情報や批判を得て、さらに資料の検討が進み、本プロジェクトの最終的な研究成果の公開がよりよいものとなること目指している。

## 5. 研究組織

ここでは、「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」全体のメンバーを掲げ、歴博の共同研究員を兼ねる者には\*、機構の連携研究の共同研究員を兼ねる者には\*\*、科研の研究分担者を兼ねる者には\*\*\*を付している。

### [日本]

岡田一男・下中記念財団\*\*\*  
 貝澤耕一・平取アイヌ文化保存会  
 貝澤 徹・工芸家  
 萱野志朗・萱野茂 二風谷アイヌ資料館  
 手塚 薫・北海道開拓記念館\*\*\*\*  
 出利葉浩司・北海道開拓記念館\*\*\*\*  
 森岡健治・沙流川歴史館\*\*\*  
 山岸俊紀・平取町教育委員会  
 吉原秀喜・平取町立二風谷アイヌ文化博物館\*\*\*  
 内田順子・国立歴史民俗博物館研究部\*\*\*\*\*(日本側プロジェクトコーディネーター、  
 共同研究代表・科研代表・連携研究マンロー班総括)  
 宮田公佳・国立歴史民俗博物館研究部\*\*\*\*

### [イギリス]

Arek Bentkowski, Photo Curator, Royal Anthropological Institute \*\* (イギリス側プロジェクトコーディネーター)  
 Hilary Callan, Director, Royal Anthropological Institute  
 Sue Donnelly, Archivist, London School of Economics  
 Susanne Hammacher, Film Officer, Royal Anthropological Institute \*\*  
 Henrietta Lidchi, Keeper of Department of World Cultures, National Museums of Scotland  
 Sarah Walpole, Archivist, Royal Anthropological Institute \*\*  
 Jane Wilkinson, Principal Curator, East and Central Asia, National Museums of Scotland

---

Sue Donnelly, Archivist, London School of Economics

「マンロー関係資料デジタル化プロジェクト」のメンバーではないが、共同研究および連携研究の枠組で本プロジェクトを支えて下さったのは、下記の両氏である。

佐々木史郎（国立民族学博物館・連携研究代表者）

佐々木利和（国立民族学博物館）

また、機構連携研究、科研では、下記の研究協力者にご参加・ご助言をいただいた。

加藤 克（北海道大学）

井上由佳（国立歴史民俗博物館）

勝田 徹（国立歴史民俗博物館）

村木美幸（アイヌ民族博物館）

## 6. 謝辞

本プロジェクトの過程では、5で掲げた方々のほかにも、多くのかたがたにご協力・ご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

青木祐介 岡本孝之 表谷美智子 五十嵐知江 尾形青天 小川正人 小野邦夫 貝澤あさの 貝澤薫 貝澤定雄 貝澤鉄雄 貝澤トメ(二風谷) 貝澤トメ(荷負) 貝澤豊彦 貝澤直一 貝澤ふみ 貝澤文俊 貝澤貢男 貝澤みな子 貝澤保雄 貝澤靖子 貝澤芳幸 貝澤理一 柏木剛 壁岸ヤナ子 川上豊治 川上洋子 川奈野一信 川奈野惣七 川奈野ワカ 萱野茂 萱野れい子 木村いと 木村充江 木村ヤエ子 黒田一彦 今光義 佐藤定子 鈴木昭一 高橋則英 近森聖美 出村文理 中島松樹 鍋澤保 二谷守一 二谷貢 二谷和歌子 浜田シズエ 春名剛 春名和代 平野みの子 平村上男 平村治男 福地晋 富士元昌則 前田静子 町田靖彦 宮野もとえ 門別さくの 安田治男 若松由理香 Inbal Livne Joao S. de Oliveira Joy Hendry Tom Bogdanowicz Eileen Munro

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 株式会社大沢商会グループ 東京国立近代美術館フィルムセンター 株式会社東京光音 平取町ウタリ対策室 北海道アイヌ協会平取支部 北海道大学 北海道立文書館 酪農学園大学付属図書館 British Film Institute British Museum

---

## 註

(1)——本作品は歴博より貸し出しをおこなっている。詳細は [http://www.rekihaku.ac.jp/research/material/dvd\\_list.html#05](http://www.rekihaku.ac.jp/research/material/dvd_list.html#05) を参照されたい。

(2)——内田順子「平成17年度国立歴史民俗博物館 民

俗研究映像『AINU Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの』：映画フィルムの資料批判的研究に関連する研究ノート」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集，179-192頁，2009年3月。

(国立歴史民俗博物館研究部)